三國志

巻の七

三國志

七の巻

吉川英治著

三國志卷の七

不許複製

昭和二十二年十二月十日　印刷
昭和二十二年十二月十五日　發行

定價七十圓

著者　吉川英治

發行者　東京都文京區音羽町三丁目十九番地
尾張眞之介

印刷者　東京都文京區久堅町百八番地
大橋芳雄

印刷所　東京都文京區久堅町百八番地
共同印刷株式會社

發行所　東京都文京區音羽町三丁目十九番地
株式會社　大日本雄辯會講談社
振替口座　東京三九三〇
電話（33）九段代表　一三一番　一八六番

共同製本

配給元　日本出版配給株式會社　東京都千代田區神田淡路町二ノ九

目次

孔明の卷

徐庶とその母……二
立つ鳥の聲……一五

諸葛氏一家……三〇
臥龍の岡……四九
孔明を訪ふ……六〇
雪千丈……七八
立春大吉……九八
出廬……一一〇
吳の情熱……一二〇

鈴音……一三五
蜂と世子……一四九
臨戰第一課……一六七
許都と荆州……一八九
新野を捨てて……二〇二
母子草……二三六
寶劍……二五一

長坂橋……二六一
一帆吳へ下る……二七六
舌戰……二九一
火中の栗……三〇七

裝幀　恩地孝四郎
挿畫　矢野知道人

孔明の巻

徐庶とその母

一

河北の廣大を併せ、遼東や遼西からも貢せられ、王城の府許都の街は、年々の殷賑に拍車をかけて、名實ともに今や中央の府たる偉觀と規模の大を具備して來た。

いはゆる華の都である。人目高いその都門へ、赤裸同樣な態たらくで逃げ歸つて來た曹仁といひ、またわづかな殘兵と共に遁れ歸つた李典といひ、不面目なことは夥しい。

『呂曠、呂翔の二將軍は歸らぬ』

『みな討死したさうだ』

『三萬の兵馬が、いつたい何騎歸つて來たか』

『餘りな慘敗ではないか』

『丞相の御威光を汚すもの』

『よろしく、ふたりの敗將を誅つて街門に曝すべしだ』

などと都雀は口喧ましい。

ましてや丞相の激怒はどんなであらうと、人々はひそかに語らつてゐたが、やがて曹仁、李典のふたりが、相府の地に拜伏して、數度の合戰に打ち負けた報告をつぶさに耳達する當日となると、曹操は聞き終つてから、一笑の下にかう云つた。

『勝敗は兵家の常だ。――よろしい！』

それきり敗戰の責任に就ては、何も問はないし、咎めもしなかつた。

たゞ一つ、彼の腑に落ちなかつたことは、曹仁といふ戰巧者な大將の畫策をことゞく擊碎して、鮮かにその裏を搔いた敵の手並のいつにも似ない戰略振りにあつた。

『こんどの戰には、始終玄德を扶けて來た從來の帷幕のほかに、何者か、新に彼を助けて、計を授けてゐたやうな形跡はなかつたか』

彼の問ひに曹仁が答へて、

『されば、御名察のとほり、單福と申すものが、新野の軍師として、參加してゐたとやら聞き及びました』

『なに、單福？』

曹操は小首を傾けて、

『天下に智者は多いが、予はまだ、單福などといふ人間を聞いたことがない。汝等のうちで誰かそれを知る者はゐるか』

扈從の群星を見まはして訊ねると、程昱がひとり呵々と笑ひ出した。

曹操は視線を彼に向けて、

『程昱。そちは知つてをるのか』

『よく知つてゐます』

『いかなる緣故で』

『すなはち潁上（安徽省・潁州）の產ですから』

『その爲人は？』

『義膽直心』

『學は？』

『六韜をそらんじ、よく經書を讀んでゐました』

『能は？』

『この人若年から好んで劍を使ひ、中平年間の末、人にたのまれて、その仇を討ち、ために詮議に遭つて、面に炭の粉を塗り、わざと髮を振り亂し、狂者の眞似して町を奔つてゐましたが、つ

ひに奉行所の手に捕はるゝも、名を答へず、爲に、車の上に縛られて、市に引き出され――知る者はなきか――と曝し廻るも、みな彼の義心をあはれんで、一人として奉行に訴へる者がなかつたと云はれてをります』

『うむ、うむ……』

曹操は、聞き入つた。非常な興味をもつたらしく、程昱の唇もとを見つめてゐた。

『――しかも亦、日頃交はる彼の朋友たちは、一夜、結束して獄中から彼を助け出して、繩を解いて、遠くへ逃がしてやつたのです。これに依つて、以後苗字をあらため、一層志を磨き、疎巾單衣、たゞ一劍を帶びて諸國をあるき、識者に就き、先輩に學び、浪々幾年かのあげく、司馬徽の門を叩き、司馬徽を繞る風流研學の徒と交はつてゐるものと聞き及んでをりました。――その人は、すなはち潁上の產れ徐庶字は元直――單福とは、世をしのぶ一時の變名に過ぎません』

二

徐庶の生ひ立ちを物語つて、程昱のはなしは寔に審かであつた。曹操は、それの終るのを待ちかねてゐたやうに、すぐ疊みかけて質問した。

『では、單福といふのは、徐庶の假名であつたか』

『さうです、潁上の徐庶といへば、知る人も多いでせうが、單福では、知る者もありますまい』
『聞けば聞くほど、ゆかしいもの。士道――借問するが、程昱、そちの才智と徐庶とを比較したら、どう云へるか』
『到底、それがしの如きは、徐庶の足もとにも及びません』
『謙遜ではないのか』
『徐庶の人物、才識、その修業を十のものとして、例へるならば、それがしの天稟はその二ぐらゐにしか當りますまい』
『ウーム。そちがそれ程まで稱へるところを見れば、よほどな人物に違ひない。曹仁、李典が敗れて歸つて來たのはむしろ道理である。……ああ』
と、曹操は嘆聲を發して、
『惜い哉、惜い哉、さういふ人物を今日まで知らず玄德の帷幕に抱へられてしまつたことは、かならずや、後に大功を立てるであらう』
『丞相。その御嘆聲はまだ早いかと存ぜられます』
『なぜか』
『徐庶が玄德に隨身したのは、ごく最近の事と思はれますから』

『それにしても、すでに軍師の任をうけたとあれば』

『かれが、玄德のために大功をあらはさぬうちに、その意を一轉させることは、さして至難ではありません』

『ほ。その理由は？』

『徐庶は、幼少のとき、早く父を喪ひ、ひとりの老母しかをりません。その老母は、彼の弟徐康の家にをりましたが、その弟も、近ごろ夭折したので、朝夕親しく老母に孝養する者が居ないわけです。——ところが徐庶その人は、幼少より親孝行で評判だつた位ですから、彼の胸中には、今、旦暮、老母を想ふの情がいつぱいだらうと推察されまする』

『なるほど——』

『故にいま、人をつかはして、懇に老母をこれへ呼びよせ、丞相より親しくお諭しあつて、老母をして子の徐庶を迎へさせるやうになすつたら、孝子徐庶は、夜を日に繼いで都へ駈けて參るでせう』

『むゝ。いかにも、おもしろい考へだ。さつそく、老母へ書簡をつかはしてみよう』

日を經て、徐庶の母は、都へ迎へ取られて來た。使者の鄭重、府門の案内、下へも置かない扱ひである。

けれど、見たところ、それは平凡な田舎の一老婆でしかない。寔に質朴そのものの姿である。幾人もの子を生んだ小柄な體は、腰が曲がりかけてゐる爲、よけい小さく見える。人に馴れない山鳩のやうな眼をして、恂々と、貴賓閣に上り、餘りに豪壯絢爛な四壁の中に置かれて、すこし頭痛でも覺えて來たやうに迷惑顏をしてゐた。

やがてのこと、曹操は群臣を從へて、これへ現れたが、老母を見ると、まるでわが母を拜するやうに犒ちつて、

『ときに、おつ母さん、あなたの子、徐元直はいま、單福と變名して、新野の劉玄德に仕へてをるさうですな。どうしてあんな一定の領地も持たない漂泊の賊黨などに組してをるのですか。——可惜、天下の奇才を抱きながら』

と、ことばもわざと俗に嚙み碎いて、やんはりと問ひかけた。

三

老母は、答を知らない。相かはらず、山鳩のやうな小さい眼を、しよぼ〳〵させて、曹操の顏を仰いでゐるだけだつた。

無理もない——

曹操は、充分に察しながら、猶もやさしく、かう云つた。

『なう、さうではないか、徐庶ほどな人物が、何を好んで、玄徳などに仕へたものか。まさか、おつ母さんの同意ではあるまいが。――しかも玄徳は、やがて征伐される運命にある逆臣ですぞ』

『……』

『もし、あなた迄が同意で奉公に出したなら、それは掌中の珠を、わざ〳〵泥のうちへ落したやうなものだ』

『……』

『どうぢやな、おつ母さん。あんたから徐庶へ手紙を一通書かれたら？　……。わしは深くあなたの子の天質を惜しんでをる。もしあなたが我が子をこれへ招きよせて、よき大將にしたいといふなら、この曹操から、天子へ奏聞いたして、かならず榮職を授け、またこの都の内に、宏荘な庭園や美しい邸宅に、多くの召使を付けて住まはせるが……』

すると、――老母は初めて唇をひらいた。何か云はうとするらしい容子に、曹操はすぐ唇をとぢて、宥はるやうにその面を見まもつた。

『丞相さま。この媼は、どらんの通りな田舍者、世の事は、何も辨へませぬが、たゞ劉玄德といふお方のうはさは、木を伐る山樵でも、田に牛を追ふ翁でも、よう口にして申してをりまするが』

『ほ。……何というてゐるか』

『劉皇叔こそ、民のために生れ出て下された當世の英雄ぢや、まことの仁君ぢやと』

『はゝゝゝ』――曹操はわざと高く笑つて、

『田野の黄童や白叟が何を知らうぞ。あれは沛郡の匹夫に生れ、若くして沓を賣り、莚を織り、稀々、亂に乘じては無懶者をあつめて無名の旗をかざし、うはべは君子の如く裝つて内に悪逆を企む不逞な人物。地方民をだましては、地方民を苦しめて歩く流賊の類にすぎん』

『……はてなう。媼が聞いてゐる世評とは、たいそう違ひすぎまする。劉玄德さまこそ、漢の景帝が玄孫におはし、堯舜の風を學び、禹湯の德を抱くお方。身を屈して貴をまねき、己を粗にして人を貴ぶ。……さう稱へぬものはありませぬがの』

『みな玄德の詐術といふもの。彼ほど巧みな僞君子はない。そんな者にあざむかれて、萬代に悪名を殘さんよりは、今もいうた通り、徐庶へ手紙を書いたがよからう。なう老母、ひと筆書け』

『さあ？……それは』

『何を迷ふ。わが子のため、また、そなた自身の老後のために。……筆、硯もそこにある。ちよつと認めたがいゝ』

『いえ。いえ』